ペンギンタイムズ

地球上最も過酷!?エンペラーペンギンの繁殖と子育てについて

男はつらいよ！

涙なしでは語れないエンペラーペンギンのオス

見た目はおっとり、のほほん、かわいらしい姿でペンギン界でも抜群の人気を誇るエンペラーペンギン。しかし、その裏では南極の冬という過酷な環境下で奮闘するエンペラーペンギンたちの繁殖子育てが。今回はその一部をご紹介する。

エンペラーペンギンの繁殖について

● ３月～４月初めごろ（南極の秋）
海から陸上に戻り、内陸の繁殖地へ向かう。

● ５月ごろ（南極の冬）
産卵。メスは卵をオスにあずけ、エサを食べに海へ戻る。オスは何も食べずにメスの帰りを待ち、卵を抱く。

南極の真冬
気温-60°C　風速30m/s

足の上で卵を抱くオスたち

● ７月ごろ（南極の冬の終わり）
ヒナがうまれるころ、エサをたくわえたメスが繁殖地に戻り、オスと交代しながら子育てをする。

● １月（南極の夏）
ヒナが巣立ちする。

過酷その１ 完・全・絶・食

繁殖地に到着後、そこで良きパートナーに巡り合い、メスが産卵するとオスはメスから卵を受け取り温める。そしてメスがエサを獲って帰ってくるまでの期間、ひたすら卵を温めるため、完全絶食状態に。その期間はなんと１００日間にもおよぶ。

過酷その２ 身を削った子育て

メスが戻るより先にヒナがふ化した場合は絶食中にもかかわらず、オスは「ペンギンミルク」と呼ばれる食道からの分泌物（消化器官の組織が剥離したもの）をヒナに与える。文字通り身を削るため、体重は絶食前後で３分の２まで減少する。ペンギンミルクが空になり、それでもメスが戻ってこない場合にはオスはヒナとともに餓死するか育児を放棄して海へ向かうかの究極の選択を強いられる。大半は後者を選択するみたいだ。

過酷その３ エサを求めて海へ

メスが戻ってくると卵やヒナをメスに預け、オスはエサを求めて海へ移動を始める。しかし、既に体はふらふらの状態。でも生きるためには歩き続けるしかないのだ。

担当飼育係の声

身を削った子育てには同じ子を持つ男として頭があがらない。子育てでつらいことがあったときにはエンペラーペンギンのオスを思いだして頑張りたいと思う。

ちなみに名古屋港水族館のエンペラーペンギンたちは繁殖シーズンも飼育係からエサがもらえるので絶食する必要は無く、卵もオスとメスが定期的に交代して温めている。

＜その他情報＞

名古屋港水族館の公式ホームページから水族館のライブ映像を視聴できる。ペンギン水槽も視聴可能でペンギン繁殖シーズンには卵を抱えているエンペラーペンギンたちを見ることができるかもしれない。